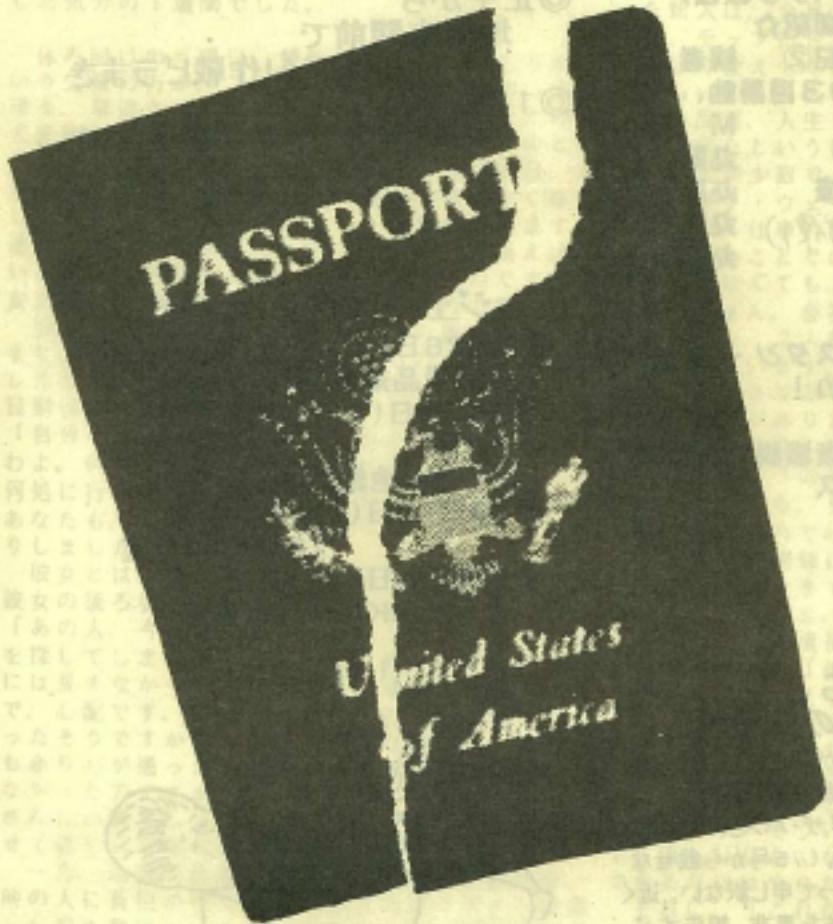


帰国者の裁判を考える会

東京都港区新橋2・8・16新橋石田ビル4階 救援連絡センター 気付 電話03(33591)1301
郵便振替 00120-12-398834 「帰国者の裁判を考える会」 定価200円 年12回分 3000円

ザ・パスポート



1998年9月4日発行

75

目次だつちゅーの！

- 1 表紙
- 2 目次・9・26デモ告知など
- 3 丸岡裁判、弁護人の上告趣意書
要旨 M
- 4 アムネスティ・インターナショナルからの遅信（レバノン救援）
- 5 レバノン救援HP御紹介
- 6~8 レバノン旅行記② 読者
- 9 ルミ工中央刑務所の3日暴動、その
様は？！ M
- 10 解放区！ 丸岡さん
- 11 ワルツ院選と今後 丸岡さん
- 12 読者の手紙(おけ便)
- 13 解放区Ⅱ 丸岡さん
- 14 畫評 YW
- 15
- 16 米国のアフガニスタン・スーダン空爆を許さない！
- 17 M
- 18 大統領のテロ報復論説は大袈裟なパフォーマンス
- 19 社会人一年生 吉村さん
- 20 会計・編集標記 YW

浴田由紀子さんから 読者の皆様へ

このところ、いろいろなことがあって、ちょっと考え直さなければならない(未総括な)問題がドツーがあるので…。しばらく「ザ・バス」の「仲間達へ」をお休みさせて下さい。(75号から載せないで!)急に勝手なことを言って申し訳ない。近くSAIKAIが動きはじめると、また是非、報告すべきことが出てきて…。その時は公判報告として書こうと思いますが…。考えが整理できたら(総括出来たら)また報告します。

まるまる一週間、夜も昼も、75年の供述調書(5人分)とにらめっこしていました。精気を全部吸い取られてしまった感じで、一日ボケーッとしています。(寝ても変な夢ばかり見てて…)

ちょっと頭を切りかえて今月中にKAZU君の原稿第1稿は終わらなければです。

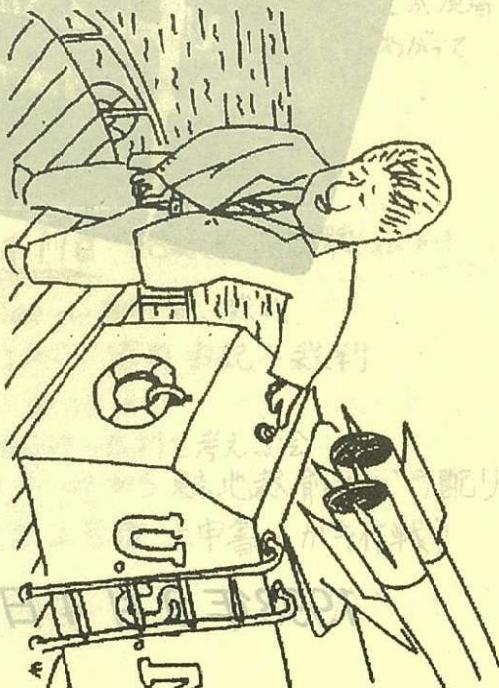
秋は忙しくなりそうだから、体力も付けないとだし。みんな、残暑に負けないでお元気でいてください。秋、はりきって前進しましょう。再見！

9. 11(金)、 東京地方裁判所へ 集まろう！！

- ◎ 8時30分より 丸岡いかき作戦ピラまき
- ◎ 10時から 西川純さんの裁判です。
- ◎ 正午から 地裁玄関前で SAIKAI作戦ピラまき
- ◎ 13時半から 浴田由紀子さんの裁判です。

スケジュールだよ～ん！

- ◎ 9月26日(土) 午後・綾瀬ブルミ工 領置品規制問題の集会・デモ
- ◎ 9月29日(火) 地裁署名提出 (SAIKAI)
- 11:30 地裁玄関前ピラまき
- ◎ 10月14日(水) 記者会見 (SAIKAI)予定
- ◎ 11月11日(水) 夕方 SAIKAI作戦報告集会



丸岡裁判・ 弁護人の上告 趣意書要旨 弁護人は辻山和人弁護士 です。

8. 30 M

読者の皆さん！

丸岡さんの上告書に対する最高裁への署名に
ご協力頂き、ありがとうございます。

「白くても赤ければ黒くなる！」と呼ばれている
様に、無罪の丸岡さんに対する反動的な政治
裁判が上告書を迎えてます。

本誌73号の『丸岡裁判の今、そしてとらえ返し』
で丸岡さん本人が自らの裁判への取り組みを振り
返っています。彼は、「極めて反動的な裁判にも
関わらず、人々の支援を受けられるような運動
にし得ず、丸岡個人の裁判にしかし得ませんでした。
私個人の反省としては、裁判は素人として
弁護団任せにしてしまい、第一審での反証を十分に
やってこなかったことです」と反省しています。

丸岡裁判の反動性は、①証拠らしい「証拠」が
写真を通してだけの目撃証言だけ ②無罪を立
証する目撃証言は排除される ③デッチアゲの違
法逮捕を合法としている(公安が勝手によろけて
の"転び公妨")に明らかです。

我々救援会として丸岡裁判への取り組みをどう
振り返り、今後の救援活動の力に変えていくこと
が出来るのか？が厳しく問われています。6月か
ら始まっている西川裁判・第一審でも、SAIKAI
作戦を着々と進めている辻田裁判でも、レバノン
救援でも、領置品規制問題でも…。

以下に、今年4月10日に出された弁護人である
辻山弁護士の上告趣意書の要旨をまとめました。
皆さんに署名へのご協力を再び呼びかけると共に、
これまでの救援のあり方と今後のあり方について
皆さんのご批判・ご意見をお待ちしております。

1 序

判決の論旨は予断と偏見に基づくものである。

要するに、検察官証拠は信用しうるが被告・弁
護側証拠は信用できないということに尽きる。

2 憲法31条(適正手続)違反(刑訴法405条1 号)

- ①現行犯逮捕(公務執行妨害罪)は捏造であり、
それに伴なう証拠収集も違法であるから、そ
れを前提とする裁判は憲法31条違反である。
- ②現行犯逮捕の認定事実は、公安警察の本
田・塚谷の証言に全面的に依拠しているが、
重大な問題点が次の様にある。

I 法的根拠が皆無であるにも関わらず、職務 質問・所持品検査が執拗に繰り返されてい る点

裁判長:「あなたは職務質問、所持品検査を継続
されたわけでしょう。先ほどから聞いていると、何
かあると思ったと、何があるとおもったんです
か？」「直感って、どんな直感なの？」「何か泥棒
かなんかと思ったんですか？」「きよろきよろして
いるし、爆弾を持っていないんでしょう。…何ら
かの犯罪があると、あなたはどう思われたんで
すか？」「…あなたは今まで職務質問を続け
ようと思ったの・本人は所持地を忘れたと言っ
てるんでしょう。所持品検査までやつたけれども、
何も出てこないわけでしょう。…あなた方して
は、どうしたらこの人を…解放しようと思つてい
たの？」「普通の職務質問の時、そんなしつこ
やるんですか。きよろきよろしていたくらいで、所
持品検査して何も出てこなかつたら、普通なら、
はい、失礼しましたと、どうぞお帰り下さい、こう
いうんじゃないの。」(泉州公判11回、本田証人
調査速記録54、55丁)これに対して本田は全く
証言出来ない。

II 頭突き行為が本当に為されたと思えず、証 言には矛盾が多すぎる点

弁護人:「現行犯逮捕に当たつてですが、その男
(被告人)は抵抗したんでしょうか？」

本田:「…その男は抵抗は無かったと思います」

弁護人:「逃げようとする動作とか振りほどこうと
するような動作はなかったですか？」

本田:「はい」

弁護人:「あなたに頭突きをくらわした後、逮捕さ
れるまでの間にどつか逃げようとするようなこと
はなかったんですか？」

本田:「ありませんでした」(10回本田証人調査
速記録77丁)

裁判官：「…頭突きのときなんですかと、先ほど丸岡と目と目があったと言いましたね。いつあつたんですか？」

本田：「上を向いて、立ち上がってきたんですか」
裁判官：「上を向いたと同時にきたら、頭のてっぺんがあたることはないんじゃないですか」(12回本田証人調書速記録50丁)このような動作・行動は相當に不自然である。

裁判長：「あなたを拝見するところ、ずいぶん頑丈な体格をしているんですけども、わざわざ人を呼んで逮捕してもらわなくたって、自分が逮捕すればいいんじゃないですか」「尻餅をついでどうして立ち上がらなかつたんですか」(12回本田証人調書速記録25、26丁)

III 匿名通報の虚偽性、爆弾処理手順の欠如に納得できる説明が為されていない点

IV 本件職務質問が明らかに違法で、頭突き行為もなかつたのだから、公務執行妨害罪も皆無で公安警察の自作自演の工夫だった事に対する憲法31条違反が明白。

3 法令違反(刑訴法411条1号)

ドバイ・ダッカ両ハイジャック事件については、既に公訴時効が完成し免訴判決が言い渡されるべきものである。

I 國外にいれば15年を越えても公訴時効にかかるない(刑訴法255条1項前段)というのは、時効制度の本質を没却し不合理。

II 僞に刑訴法255条が適用されるにしても、その証明が為されていない。判決では「昭和47年4月の出國後、昭和62年6月までの間…被告人が偽名で入國したことを窺わせる事情もない」と断じているが、公安警察が免訴判決を恐れて、出入國情報を公開しないだけのことである。

4 事実誤認(刑訴法411条3号)

I ドバイ事件とダッカ事件の犯人の同一性には疑いがある

II ドバイ事件とダッカ事件の犯人の容姿と、被告人の容姿との比較する方法に誤りがある。

III 事件当時の被告人の容姿の特定が判決では為されていない。

**丸岡さんは
絶対に無実だ！**

泉水同志のお兄さんのお墓参りに行った8月14日、アムネスティ・インターナショナル(以後、AIと略します)から、回答が届きました。以下は、その訳です。

岡本問題について

1998年7月30日

岡本公三がレバノンから日本へ送還される可能性について、あなたから情報を送って頂いて有り難う。現在東拘におられる丸岡修氏からも、また(その件で)御手紙を頂いています。この情報を彼に伝えて下さると有り難いのですが。

1997年7月8日付けの手紙でお知らせしたように、我々はこの件を一貫してフォローし続けております。我々の情報によれば、岡本氏は、レバノンで3年の実刑に服役中です。レバノン当局が明言するには、もし彼を国外退去がすることなるとしても、彼の刑期満了以前には行わないという事です。我々の側で行動を起こす事があるとしたら、彼の(満期)釈放期日の近くとか、もし国外退去となつたらその日の間近という事になるでしょう。我々の側で何かプランがあるような場合には、あなたに連絡をさしあげる事になるでしょう。

この手紙があなたの関心事への回答になっておりますように願っておりますし、我々の活動にあなたが関心を寄せて下さっている事に、再度、ここで、御礼を述べさせて下さい。

草々

マーク・アリソン
MARK ALISON

(東アジア班)

アムネスティ・インターナショナル
国際書記局

1 EASTON ST., LONDON WC1X 8DJ

UNITED KINGDOM

TEL: INT. CODE: (44) (171) 413 5500
FAX INT. CODE: (44) (171) 956 1157
E-MAIL: amnestyis@amnesty.org
WEB: http://www.amnesty.org

レバノン現地の救援会である “岡本公三と 彼の同志たちの 友人の会” ホームページ御紹介だよ～ん！

読者の皆さんでインターネットをご利用されている方も少なくないと思います。「インターネットなんか、パソコンなんか人類の敵だと意気盛んな方々もいらっしゃると思います。とりあえず今回、レバノン現地救援会の“岡本公三と彼の同志たちの友人の会”的活動情報を紹介致します。

彼らのホームページはパレスチナ人の活動紹介サイトの一つとしてネット上にあります。その構成は、①会の設立主旨の説明・活動紹介 ②リッダ闘争26周年の政治集会の報告 ③岡本さんプロフィール紹介、となっています。各層の内容は、

①表紙(会の設立主旨・活動紹介)

会は1997年2月5日に設立し、記者会見を同時に開いた。そこでは岡本さんと彼の同志たちである日本赤軍の活動を紹介するなどした。

現在取り組んでいる運動は、レバノン政府に対する署名行動で、2つの要求を掲げている。一つは、彼らの即時釈放、そしてもう一つはレバノンへの政治亡命を認めさせることである。今まで、会はレバノン人・パレスチナ人・大学生たちなどから約8500人の署名を集めた。1998年7月4日から6日にかけて、レバノンの国会議員たちに会い、署名を呼びかけることを計画している。また、リッダ闘争26周年の政治集会がシャティーラ・キャンプ(編集部注:ベイルートのパレスチナ人キャンプ)で行われ、数々のアピールが為された。

②リッダ闘争26周年の政治集会

この集会は、シャティーラ・キャンプで350人の参加者と共に開かれた。発言者としては、

進歩的青年のための団体

レバノン国民戦線

アラブ・パレスチナ人女性総同盟

PFLP-GC

(パレスチナ解放人民戦線・総司令部派)

シオニストの文化侵略に反対する会議

革命的パレスチナ共産党

岡本公三と彼の同志たちの友人の会

各アピール内容の要旨は、

1. 岡本公三と日本赤軍への連帯表明
2. 武装闘争の今日的意義
3. リッダ闘争の説明(PFLP-GCから)
4. 岡本さんがイスラエルから奪還された時の状況について
(アラブ・パレスチナ人女性総同盟から)
5. 国際主義を体現する日本赤軍について
6. パレスチナ人キャンプの外で国際主義を実践することの意義
7. 会の今後の活動方針

③岡本さんプロフィール

岡本さんは、パレスチナの大義のための闘いに参加するためにパレスチナの被占領地にやってきた日本人の革命家です。彼は、彼の友人2人と共にイスラエルが民用・軍用として使用しているリッダ空港で、イスラエル兵に対して銃撃を行ないました。彼の2人の友人は戦死し、岡本さんは瀕死の重傷を負いました。その後、数百人のパレスチナ人戦士と共に奪還されるまでの間、イスラエルの獄中に囚われました。

ところが、レバノン政府は岡本さんに感謝するのではなく、他4名の同志たちと共に偽造旅券行使の罪で逮捕し獄中に放り込んだのです。

リッダ闘争はイスラエルに莫大な被害を与え、それによりイスラエルは観光収益を激減させ、イスラエルの伝説(編集部注:歴史の偽造)を暴露・宣伝したのです。この闘争は、被抑圧者に眞の連帯の姿勢を示したのです。

岡本さんは現在、4名の同志たちと共にレバノンの刑務所に囚われています。房は非常にジメジメし、極端に狭いのです。彼らは日本語を読むことも許可されず、いかなる新聞の所持も認められていないのです。これを非人間的で劣悪な処遇と言わざる何と表現したらよいのでしょうか！！

<直接来てね！>

レバノン現地の救援会HPのアドレスは

www.geocities.com/CapitolHill/Senate/5617/okamoto.htm

帰国人の裁判を考える会宛ての電子メールは、

sper@tky2.3web.ne.jp だよ～ん！ヨロビク。

レバノン旅行記②

夏原 得樂斗

もう1年近く前のことになるが97年9月、僕はレバノンへ行った。以前からレバノンがどういう所なのか自分の目で見てみたいと思っていた。行きたかった理由はそれだけである。パスポート読者には物足りないかもしれないがこれは1旅行者の単なる旅行記である。

4日目—北部の街トリボリ

北部のレバノン第2の都市トリボリへバスで移動する。ペイルート中心部から郊外へ出るとやはり破壊された建物が目立ってくる。そのうち左側に地中海が見えてきて、2、300mおきに市の検問所が設置されている。

バスの中はアラブ音楽がずっと流れていてトリボリに着くまでの2時間弱は退屈しなかった。バスを降りて近くに航空会社のオフィスがあつたので帰りの便のリコンファームを済ませた。「安い宿を知らないか」と尋ねると、親切にも一緒に来て案内してくれた。1番きれいだったアッ・トールという大通り沿いのホテルに決めた。1泊20\$のところを2泊6000\$にしてもらった。ペイルートのムンライトと同額とは思えない位清潔な部屋だ。

さっそく外に出て旧市街を歩いた。果物、野菜、魚、肉、お菓子、雑貨屋といろんな店がひじめき合っている感じで活気があり、石造りの旧い建物や迷路のように入り組んだ細い道などはエルサレムの旧市街を彷彿させる。歩いていると店の入やら通行人やらいろいろな人が話しかけてくる。僕が日本人だとわかると、「プロースリィ」と言っている。何の事だかわからないのでキヨトンとしていると、「ジャッキーシャン」とさらに言ってきた。そう、ブルース・リーとジャッキー・チエンの事だったのだ。レバノンの人は彼らは日本人だと思っているらしい。レバノン滞在中、何度も「プロースリィ」と声をかけられたかわからない。確かにモンゴロイド系だから顔つきは同じだ。僕らがアラブの人を個別で見分ける事が出来ないのと同じ事だ。

とにかくここはいろんな人が話しかけてきて、ペイルートとは違い下町っていう感じでアラブコーヒーをおごってもらったり、おじいちゃん達がゲームを楽しんでいるのをしばらく眺めていたり、子供達と追いかけっこしたり、すっかり僕はここが気に入ってしまった。

夜はレバノンに来てはじめて”まともな”食事をした。今までサンドイッチとかハンバーガーとかビザしか食べてなかったので、レバノン料理のレストランに入りケフタという羊肉のミンチを焼いたものとグリルされた魚を食べた。生野菜とかパンも付いているので、おなかいっぱいになって食べきれなかった。おいしかったのだが、その店にアルコール類がなかったのが残念だった。ビールが飲みたかった。

5日目—レバノン杉

午前中、旧市街をうろついてからレバノン国旗のデザインにもなっているレバノン杉を見に行つた。トリボリからセルビスで、ブシャーレというトリボリから4、50kmのところまで5000\$、レバノン杉はそこから5km程なのだが、現地の人は行かないでのセルビスのルートではないらしく、同じ車で同じ運転手なのにブシャーレからレバノン杉までチャーター扱いで、ブシャーレに戻るまでということで2000\$払った。

レバノン杉はわざわざ見に来る程のものではなかった。僕の他に観光客は1組しかいなかった。ただ、花粉アレルギーの僕がこれだけの杉を前にしてクシャミ1つ出なかったということは日本での春先のアレルギー症状は複合汚染によるものだということがよくわかった。

それはそうとレバノンはタバコ天国だ。タバコ嫌いの僕にとってセルビスやバスの中で吸われるのではなくたまたまではない。ひどい時は運転手も含め、僕以外の全員が吸っていたこともあった。またタバコをすすめてくるのである。最初の頃は「アイドントスマーキ」と丁寧に言っていたが、その後「ノー」しか言わなくなり、レバノン最後の頃には黙って首を横に振るだけの対応と、徐々に変化していく。

ブシャーレでセルビスを降ろされ、さてどうやって帰ろうかとキヨロキヨロして立っていると白タクが来たのでこれに乗ったのだが、この運転手にはムカついた。乗る時にセルビスではなくチャーターだから高い、2000\$だと言つときながら途中、客を乗せているのである。降りる時にもう一度「いくらだ」と聞くと、言つただろと言わんばかりの口調で2000\$と言うので、他に客を乗せ、しかも彼らはセルビス料金だったじゃないかと何度もやり合ったが、最後までそいつは折れなかった。

読者よりのお手紙の御紹介

人民新聞等に5、30メッセージとか、特報、うごきなど載るのはいい。なかなか載せてくれぬかもしれないが、その他のメディアを探し広げるよう、努力を期待する。その為、むずかしいか、できる丈の短文で気軽なカッコつけないものを。
(投稿は特に)

MU/MI

6日目—ジェイタ

再びペイルートへ戻る。途中、何カ所か立ち寄った。1つ目はジェイタ洞窟（鍾乳洞）。ペイルートから20km程北のジェニエでバスを降り、セルビスを拾う。ジェイタ洞窟のつもりで「ジェイタ」と言うと2000\$と言うので安いなと思ったら案の定ジェイタ洞窟へ向かう道との分岐点で降ろされてしまった。しょうがないから全荷物の入ったバックパックを背負って歩き始めた。途中、軍の検問所があり兵士と挨拶したが笑顔で対応してくれ、洞窟まであとどれ位かと聞いたらあと15分位だと答えてくれた。黙っていると怖しそうだが、彼ら結構やさしいのかもしれない。歩き続けていると後ろから来た車が止まってくれ洞窟まで乗せてもらった。ヒッチハイクをした訳ではないのに声をかけてきてくれて、体力的に助かったことよりも気持ちがすごくありがたかった。

鍾乳洞の中はそれはもう幻想的な素晴らしい別世界のようだった。もちろん見せるためにコンクリートの道を作ったり、ライトアップしていたりするのだが何千年、何万年という時間によって作られた自然というものは人間が作るどんな建造物よりも美しい。

16500\$の入場料は決して高くないと思う。

その後ジュニエに戻り、マリアのような白い像があるハリッサという丘の上までケーブルカーで登った。

旅というのは人の好意や親切で成り立っているようなものだが、ここレバノンの人達は本当に親切な人が多い。ハリッサとかビブロスの遺跡を見に行けばよいと、紙に行き方を書いて教えてくれたのもトリボリから乗ったバスで隣に座った科学の先生やってるというおじさんで、さらに僕が降りたい所の近くにならわざわざ前の方へ行って運転手に僕を降ろしてくれるよう頼んでくれたり、また、ジュニエからケーブルカー乗り場へ移動するときもそこまでセルビスで同乗した人が途中まで一緒にバスに乗ってくれた。僕が穴のあいたTシャツを着てるので金を持ってなさそうに見えたのか、これに乗って行くのが一番安いと、500\$のバスを教えてくれた。

ビブロスの遺跡を見た後、バスとセルビスを乗り継いで再びペイルートハムラ通りまで戻ってきた。ホテルはMACE HOTEL、1泊30\$を3泊するからと1泊25\$にまけてもらった。少し高いが、同じ値段で1度トリボリのアッ・トールに泊まった後ムーンライトにもう1度泊まる気になれず、TV、エアコン付きのこのホテルにした。

7日目—レバノン南部

今日は南部へ。ペイルートから移動する場合、コーラとダウラというセルビス、バスのターミナルがあり、ハムラ通りから南部へ向かうにはまずセルビスでコーラまで行き（1000\$）、目的地別にセルビスやバスに乗る。今日の目的地スールまでは6000\$。

セルビスに乗るとすぐあとから日本人の女性が乗ってきて、思わずお互いに「こんにちわ」と挨拶した。レバノンに来てから日本人と会ったのは広河さん一行と、ハムラ通りを歩いていた時にすれ違ったバックパッカー風の男性以来である。

名前も歳も聞かなかったが彼女は20代後半だろうと思う。1人旅だそうで、スールに着くまでの2時間余り、しばらく日本語を話していない事もありずっと話していた。この後トリボリへ戻るそうだが、何と、トリボリで僕と同じホテルに泊まっていたそうだ。彼女も旅行が好きで、今までいろんな所へ行ったそうだが、ここレバノンに関して2人の一致した意見は物価が高いことと、（もちろん日本やヨーロッパよりは安いが…）親切な人が多いということである。僕も今までいろいろ旅行しているが、今回程親切な人に多く出会ったのは初めてである。だから困った事になってもなんとかなるだろうという妙な安心感がいつの間にか生まれていた。レバノン南部といえば時折イスラエルが侵攻して来る所である。今、レバノン南部へ行こうとしているのに（もちろん観光客が立ち入ることが出来る範囲内であるが）、最初にレバノンに着いた時の緊張感は全くくなっていた。

スールに着いて彼女と一緒に地中海に面したローマ遺跡を見た。時間はちょうど昼時。街に設置されているスピーカーからアザーンが響きわたっている。僕はイスラム教徒ではないがこのアザーンを聞くと心が洗われるような感じがする。

遺跡は地中海に面していて、遺跡といっても円柱が何本かニョキニョキと残っている位のものである。海岸沿いでおじさんが我々に声をかけてきた。ギリシャ時代とかの古いコインを買わないと何種類かのコインを見せて説明を始めた。値段を聞いたら高かったので別に興味もないで買わないと言ったら割とあっさり売るのをあきらめてそれ以上すすめてこなかったので本当に値打ちのあるものなのかも知れない。その人はまた、イスラエルのせいで漁業区域が制限されているとかカナの虐殺のことについて地中海の先のイスラエル占領地の方を指さして話していた。同行の彼女はバレスチナ問題とかそういう事について知らないようで、そういう話をしたら、そういう学校で習ったような気がするとか言っていた。本当はこれから行くキプロスが目的なのどうだ。

遺跡を見た後、ハンバーガーをバクつきながら街を少しうろついてから彼女とセルビスに乗って帰途についた。僕はサイダで降りたが、彼女はこれからトリボリに戻るらしいのでジェイタの洞窟をお勧めした。サイダでは13世紀に十字軍が造ったとかいう海の城壁を見てペイルートに戻った。



8日目—バールベック

レバノン観光のポイントはペイルート、ビブロス、バールベックの3Bと言われているらしい。ペイルートはもちろんビブロスの遺跡も見て、今日はレバノン観光最大のみどころであるバールベックへ出向く。セルビスでコーラまで行き、コーラからバールベックまでセルビスで2時間弱、7,000円。

途中、山の方を走っている時は肌寒かった。バールベック遺跡の入場料がこれまた高く1,000円。典型的な円柱のローマ遺跡となるほど確かに壮大な眺めである。どんな遺跡でもそうだが、建築物自体は素晴らしいものなのかもしれないが、どうも僕はこういった物は権力者がその力を誇示するために作った、というか作らせたものであると考えてしまい素直に感動できないのである。遺跡を一周した後、近くの市場をうろついてから帰途についた。

セルビスからはベカ高原が見える。あそここのどこかで日本赤軍の人達は訓練をしていたのかと思いながら眺めていた。

9日目—レバノン最後の日

レバノンを発つ日。ただ飛行機に乗るのは夜中なので時間は十分ある。あと1カ所だけ行ってみたいところがあった。内戦でズタズタになったと言っているダントンタウンである。かつては安宿が集中していたらしい。昼頃チェックアウトを済ませてからフロントで荷物を預かってもらい出掛けた。閑散とした日曜のハムラ通りから3、40分は歩いたんだろうか、この辺がそうなのかなという所にたどり着いた。港の近くで崩壊した建物や壁に銃弾の跡がたくさんあるビルが立ち並んでいる。どこからどこまでがダントンタウンなのかわからないがメイン通りらしき所を歩いてみても営業している店はほとんどなくあまり生活の気配が感じられなかった。日曜だからなのか、それともいつもこんな感じなのかはわからない。

ホテルに戻ったのは3時頃、空港へ行くまでには時間が余る。かといって店が閉まっているハムラ通りを歩いてもしょうがないし、暑い中2、3時間も歩いて疲れててしまった。しばらくホテルのフロントのテレビでやってるボートレース中継をボーッと見ながら時間をつぶしていたが、それも飽きてきたのでちょっと早すぎるが空港へ行くことにした。

コーラから空港行きのセルビスはなかなかつかまらないだろうと思ったが、10分と待たず空港行きのセルビスに乗れて、5時頃にはもう空港に着いてしまった。あり余っている時間のおかげでこの旅にもって来た重信房子さんの『ペイルート82年夏』を読み終えた。重信さんのアパートが爆撃され、重信さんにコーヒーを入れようとしていた妊婦が吹き飛ばされてしまっていたところは何度読んでも涙が出てくる。

いろんな人の親切に支えられ安心しきった旅をしていたが、かつてはこの本に書かれているような事が行われていた街にいたのかと、レバノンを発つ時に改めて思った。最後に34\$という山田税に驚かされたが、機会があればまた訪れてみたい。その時は復興も進んで廢墟のようなビルはなくなっているかも知れないけど人々の親切な気持ちちはそのままであってほしい。

対テロ報復などとして米軍が実施した空爆作戦は次の通り。

1983年9月 ペイルートの大使館爆破事件に対する報復として、レバノンのドルーズ派民兵拠点を艦砲射撃

同年12月 同拠点を再び艦砲射撃、米艦載機がレバノンのシリア軍陣地を空爆

86年3月 米軍機へのミサイル攻撃の報復としてリビアの艦艇レーダー基地を空爆

同年4月 ベルリンのディスコ爆破事件に対する報復としてリビアの首都トリポリを空爆

93年1月 英、フランス軍と共にイラクのミサイル基地や「核関連施設」を巡航ミサイルなどで空爆

同年6月 リバノン本統領時、暗殺未遂事件に対する報復として、イラクの首都バグダードで情報機関本部を巡航ミサイルで攻撃

98年8月 大使館爆破事件の報復として、ドンカースタングとストライクのミサイル攻撃によって空爆

なぜ今やなくてはならないのか、その理由を知りたい。いつらいどんな証拠があつたのか教えてもらいたい。

アーレン・スペクター米上院議員(共和党)

ケニアとタンザニアの米大使館爆破テロへの報復として、クリントンがアフガニスタンとスキヤンダルに対する攻撃を命じたのは、セックス、

「スキャンドルの偽証疑惑から注意をそらすためだうのではないかと聞いたとして

二ージャージー州モリスプレインズに住む会員だうのではないかと聞いたとして

計士リナ・フェラー——クリントンが報復攻撃を命じたのは、スキヤンダルから目をそらすためではなかったとして

ニュース、ウイーク 9.2号より

ルミエ中央刑務所の3月暴動、その後は？！

98.7.26 M

先日御紹介した現地マスコミ報道でも明らかな様に、駐レバノン日本大使・堀口が公然と「強制送還後、日本で裁く！」とレバノン政府への圧力をかけ、「いつ国外退去＝強制送還になつても不思議ではない」状況に、彼らは置かれています。

“3月暴動”では元気に拳を挙げて頑張っていた彼らが収監されているルミエ刑務所の様子は？ 6月27日付けの現地英字紙ティリー・スター紙に入権団体の報告による刑務所の様子が紹介されています。

1. “過密状態”も依然のままだ！

フランス・リヨンに本部を置く国際人権団体・国際刑務所ウォッチ(IPW)の代表団は、ここ2週間を刑務所を訪問し、当局者やNGO関係者と会い、1ヶ月以内に発表される10度目の年次レポートに初めてレバノンを紹介する為に活動してきた。

ロイ・マッドコール(ROY MADKOUR)－IPW レバノン代表の刑事弁護士は昨日、2667人が収監されているレバノン最大の刑務所・拘置所を訪問し、新着任のマジ・ムンドヒール・アッヨーブに処遇改善の進展に感謝を表した。ロイは「アッヨーブが着任した3ヶ月前から着実に改善は進んでいる。これまでに医者の数が増え、歯医者が開設され、心臓病の獄中者への設備が2組、エイズ患者への設備も設けられた。改善は所内の獄中者同士のコミュニケーション施設や、弁護士・親族との面会施設にも見られる。しかし、暴動の原因となった”過密状態”については、改善の余地を残している」と語った。

2. そんなに混雑しているの？！

ロイによれば、ルミエ刑務所は当初600人を収容するために立てられた。6棟ある建物の内、3棟は軍が使用しており、残る3棟に定員の4倍の人数を収容している現状だと言う。通常の広さの房には平均6名が押し込められ、少し広い房には12名が押し込められている所もあると言う。

改善が限られたごく僅かの予算内でしか行われていないことへの懸念をIPWは示し、「関係法の改正により、刑務所管轄が内務省から司法省に移され、刑務所行政が改善されたことに加え、更により大規模な予算が割り当てる様、政府に要請している」とロイは語った。「刑務所の理事会が60年代に設置されたが全く機能せず、以降、一貫して内務省管轄に置かれてきた」と非難し、「現在、兵士が暴力的に行なっている複雑な司法上のプロセスや、獄中者の処遇を監督する司法担当庁を設置する様に刑法を変えるべきである」と指摘した。また、未決囚と既決囚、及び重刑と軽刑の既決囚が刑法56条に基づき、分離されていないのも、スペースのなさからであると指摘した。

3. 社会は自由以外を奪ってはいけない！

「10年間、100か国での経験から、刑務所システムを実際に改善していくことは非常に困難だ。我々の役割は、当局への忠告と処遇改善に活動しているNGOの皆さんと協力し合い、世論を喚起することだ」とした。ロイはまた、自身が弁護していた獄中者が2年前に非人間的な処遇下で死亡したことを回想しながら、「社会は誰かが犯罪を犯した時、皆の自由を奪って罰を負わせる。それ以外の権利を奪つてはいけないのだ」と締めくくった。

解放区 I

98.8.26 丸岡修

1. 丸岡裁判

(1) 読者からの疑問

X・1さん (74号とは別の方)

74号の考える会の檄を読みました。なんか、ドロドロ。「反動偏向分子共」と超固い表現してるかと思えば、「権威ある判事の方々」。矛盾しません? 前者の語は近寄り難いし、後者は変。／私の意見としては、「考える会は微力ながらも丸岡・泉水の大量ガサの嵐の中、結成し活動してきた」という考える会の性格づけを少し書いて、弾圧の内容(裁判の内容)を書いて、「是非共、皆さんと共にこの弾圧をはね返していきたい」として支援する方が良いと思います。

X・2さん (74号とは別の方)

私は、日本赤軍の人たちや考える会の人たちは弾圧に対する救援をきちんとやれていないのでないか、という批判を持ってています。大型ガサが丸岡さん、泉水さんの名でやられたのに、一番沈黙しているのは日本赤軍の人たちではないか、なぜ丸岡さんらの救援を前面に出してやってこなかったのか非常に疑問です。

日本赤軍の人たちは今更出てこられないのかもしれないけど、顔も出し、名前も出して、「あの人がやっているのなら」というレベルでの親近感を持つてもらうことが大事だと思います。市民運動の中では「あの人は赤軍関係らしい」という話が出ているのを、赤軍の人たちはご存知なのかしら。隠れているだけでは人々の支持は受けられないと思います。

考える会の人たちも、もっと顔が見える形でやってほしいと思います。色んな人たちの文章が「バス」に出るようになったのはいいですね。考える会も一般の人たちに身近に感じられる努力が必要だと思います。

(2) 私の考え方

①考える会は、表現を市民的に!

「反動偏向分子」は筆者の若すぎる表現ですね。私もこういうオドロオドロした語を使

うべきではない、と思います。運動に関わりのない自分のおじさん、おばさんに使えるのと同じ用語を使うべきだと思います。言葉を過激にして表現する手法は良くありません。「予断と偏見しか持たない判事たち」という表現にすべきだと思います。一般の市民に通用する言葉遣いをすべきだと思います。

ついでに。1年ほど前の「バス」に考える会は、レバノンで拘束されている5人に対して「岡本隊、日本赤軍兵士」を使っていました。足立同志らがそう表現しているからですが。むこうに居る同志達は武装闘争が神聖な権利として承認されている地であるから、軍事用語が自然に出てしまいます。しかし、武装闘争の市民権が失われて久しい日本人々にそう語るのは違和感を与えるだけで、門前払いをくってしまいます。また、私たちは「軍」を名乗っていても政治組織なのですから、70年代に使っていた用語を使うのは、私自身にも抵抗があります。80年以降は「日本革命家」を名乗っても「赤軍兵士」とはほとんど名乗りません。戦場ではもちろん兵士だけ。言葉は、誰に何を伝えたいのかきちんと使い分けるべきです。

②私たち日本赤軍の欠陥

客観的にはX・2さんの指摘通りだと思います。私もその日本赤軍自身なので分かりますが、主観的には「救援をきちんとしない」つもりは全くありません。はっきり言えば、私たちはそこまで手が回らないのです。なぜそうなってしまったか、74号のBさんによる赤軍批判への私のコメントの中で述べます。

「顔が見えない」の指摘は全くその通り。

/字数つきた。では又。

誤植などの訂正 (74号) 丸岡修

- ①P5右6行目 反対運動が多数派 → 反対が多数派
- ②P7左13行目 聞わせ → 戰わせ
- ③P7左19行目 攻撃体制 → 攻撃姿勢
- ④P7左25行目 遺言を残し → 遺言を残した
- ⑤P7左28行目 全員の死を → 全員の死をも

7月参院選と今後

投票

1998.8.28 丸岡 修

1. 一步前進半歩後退

7月12日投票の参院選挙は、予想以上に投票率が伸びて(+14点)の59%自民党的な勢力につづり(+17点)(改選61点45)、旧来の自民党支持者の一部も保守支局に転じたことが自由新党的な傾向に出ています(下)。89年に社会党は自民党に打ち勝ちましたが、その後の半年後の統一選では自民党的後退を示しています。次回自民党的分裂と日本新党的登場を待つことになります。それも分解し「自民後退」の状況での再選挙には大きな意味があります。すなはち、日本人民のすべてが保守安定志向に向かって投票者の過半数へ政治的変化を求めていることを証明したからです。

しかし、今回の結果を複数条件に落とすことできません。
①自民党にとって代わる勢力が中道右派+保守リベラルの民主党であり、中道左派の社民でもなければ革新派の共産党でもないこと。
②自民不支持の理由が安保・沖縄の反対新開党でもなく、議連でもなく、政治問題でもなく、不支持による敗北であること、特に選挙後半の「巨戦」をめぐる結果を入れて二軒三軒が自民党的本性を大衆前にさらしてしまった結果によるものであること。

つまり、第一に、民主党主導の政府才非自民であっても順りよく保守に近いもののが勝利できました。第二に、「不況時に自民党が弱い」神話が崩れたものの裏面回復すれば(今回も構造的不況であり)後半には回復しない。自民党的支持回復につながっています。故に、「自民党でも民主党でも本質同じ」として今回の選挙を評価するのも誤りから、無視にすべきのも誤りです。

社民党政権時代に、確立の成績だけを差別するのではなく、良い面についても大きく宣言し直す

自己批判をすべきなのにそれをしたが、なぜ然に、自民党政権は集まらませんでした。社民党政権と新社会党的議席喪失は、中道左派内で革新派の勢力を減らす結果となり、残念です。民主党の保守化止めには自民党的伸長が必要だと思います。

左: 共産党が四公会での
首相候補にあたって
落への投票を決めた
ことは、歓迎です。

2. 今後の展望

右山以前の細川・羽田の両非自民連立政権も終了しました。現在は小沢一郎らの新保守主義が後退しており、民主党主導の非自民連立政権の登場は自民党的の足を止める意味においても必要です。人民の利益から言えば一步前進。前進が後退がむけたら左派(革命的)の基準で計るのではなく、人民全体の利益から計らなければなりません。「よりまし」行政権を握らなければならぬから徐々に革新派を成長させて、「人民政府」へと発展させていくべきいいのです。

普通人の階級「オリーブの木」は進歩的であるためには、中道左派の市民党や無党派も含め、議席をもつての参加が大事であり、共産党も例外的ではありません。

現在の民主党と社民党と無党派、革新派を排除しての「反自民」でしかなく、日本版「オリーブの木」はイタリア本家のそれとは似て非なるものです。しかし直率性を持つように日本版のそれも考えていくか、革新派の方針が問われます。(イタリア人は自身がアシズヒを打倒してあり、人々の意識の反映ではない。日本人は反共どくろが社民アレルギーもあり。伊オリーブの木の本義が在る民主党であり、保守に政策を広げているが、共産党政権の専制能力とも取つけている)

（逆命派のときべき脚色）
（人民政府への展望、共産党的「社民化」の評価等→次号）

オケニア・タンザニアでの米大使館爆破に因し、
反米・ラティンアメリカに核兵器の撤去を主張した。
-の本質を土台に置いて、左派には支持しない。
8.20 ミクリントン政権の国家テロを許さず！ スーダンなどの主権侵害
糾弾！ 本質的米国とイスラム右翼の
次第で詳しく報告します。イスラム原教主義にも右から左まであります。

読者への手紙 (こすげ便り)

98年処暑 丸岡修

皆さん、こんにちは！ 関東は夏らしい夏が来ないままにもう秋の風情。つくづくほしの鳴声が病舎の庭にも。

6月は「48年革命」と「共産主義者（共産党）宣言」150周年なので宣言でも再読するかと思っているうちに8月も終わり。残された時間が少ないのであせります。

8月4日は、西川純同志の48歳の誕生日でした。★誕生日おめでとう！

謝。

ところで、考える会作成のハガキ（73号）には印の欄がありませんでしたが、ハンコ社会の日本では、公的機関への提出書類にはハンコが必要です（特に裁判所）。三文判で済みあまり意味ないのに。ハガキの方には無くっても問題はないでしょう。元々裁判所は「上申書」とはみなさず、「要望書」とみなしているでしょうから。

1. 丸岡裁判

(1) 上告趣意補充書

現在、上告趣意補充書を半月ごとに7月下旬から出しています。一気に書きあげてしまうつもりでしたが、そういう体力はなく少しづつ書いては出し。

裁判所に幻想を持っている人たちが多いのではっきり言います。控訴審以降は被告人に法廷での陳述権が無いのですが、被告人が提出するいかなる文章も受取るだけで審理の対象にはなりません。一審でさえ、私のすべての陳述書は反論さえもなし。完全に無視されました。控訴審判決では私の趣意書への反論という形になりましたが、それは弁護人の趣意書が期日までに提出されなかつたため（弁護人の期日延期の申請が却下されたためで原因は裁判所にあり！）。通常は被告人の意見を無視するのに、「反論させられた」判事と検事共には耐え難い侮辱であったようです。

何が言いたいかと言うと、私（被告人）がいくら大論文を書いたところで、全く何の足しにもならないということです。無駄になると分かって書くのは、気の進まないことこの上もなし。私は裁判所の記録に残させておく、ただこの一点でのみ書いています。後世の人たちが正しく読んでくれることを期待して。それ以外に書く意義を認められない。

(2) 読者の皆さんへの感謝！

ハガキなど最高裁判所第三小法廷に宛て要望書など送っていただいていること、とても有難く。考える会の皆さんへの応援にも感

2. 病状

重症肺炎の重体から受けたダメージ（呼吸停止、多臓器不全症候群）で心停止寸前まで進んだことによる心不全によって、現在の慢性心不全の療養になっています。心肥大と心室性期外収縮の不整脈による心不全ですが、強心剤、抗不整脈剤、降圧剤の投与（利尿剤も服用していたが自分で十分に尿を出せるようになり去年に停止）、減塩食、病舎療養でかなり改善されています。5月から軽い運動が許可され、実施してもすぐ心臓に水がたまることはなくなっています。ずっと微熱から平熱と日々になっています。日に1、2回の胸痛が去れば、ほぼ普通に。心肥大は健常人に近くまで縮小しましたが、心筋がくたびれたままが現状です。

（注：降圧剤は血圧正常にも心不全治療に有効）

3. 唯今国賠訴訟中

東拘による『別冊宝島・ムショの本』（丸岡ら執筆）と『怒りていう、逃亡には非ず』（松下竜一氏著）の交付遅延と抹消、「獄中19年」（徐勝氏著）の抹消を違法として東京地裁に提訴中。被告・国側のデタラメ反論に対して、60頁の陳述書を提出。8月27日の公判で、多分結審。原告の出廷を裁判所が認めず、けしからん！（法律扶助協会が勝訴の見込みありと訴訟費用貸与）

解放区 II

「公安関係者立入禁止」

1998.8.28

丸岡修

Iの続き 別の項目で書くとしていたが、続けます。

1. 丸岡裁判

(2) 私の考え方

② 私たち日本赤軍の欠點 (つづき)

もちろん、私たち(日本赤軍)には丸岡・東木松原を守らんとする意志はあります。でも、実際には日本赤軍(以下、赤と記す)の力量として一枚にまで直接手を回すことはできず、友人たちに預けるしかできないのです。牧場を含む公然合法部分の設置を国内における組織建設のために十分含んでいたのです(袖ヶ浦には「赤軍派入り」部隊(公然合法の存在)の設置」という方針はあった)。その意味で「守らん」と牧場する」意志はあるっても、重複化できる余裕は全くないのです。

問題は、私自身が赤軍に従事していたように赤もまたどうなっていなかったのです。『赤なら人を守り得るだろう』とも思っていたでしょう(笑)。耕原はず山の私(泣)。考るる会には、赤軍とは全く関わりのない人たちも居ますが、肉内(合法的!)かあたった人たちも居ます。赤との関係で過去に接して来た人、赤の友好団体に居た人、そういう友人たちです。「友好団体」だったのは、京都の「VZ58」という奥平兄・安田両同志や私を送り出した京大パルチの一部を中心としたグルーパ、そして「世界革命組織情報センター」という映画「赤軍-PFLP世界革命宣言」上映隊から発展した足立同志らのグルーパです。両グルーパとも非合法活動とは一切関係のない、公然合法の運動をやっていましたが、公然合法の輪につけといふからせぬ余りにも厳しく(車椅子まで統めさせるとやる、友人、家族にまで嫌がらせがある、また74年9月での同志殺害を契機に、足立同志まで日本に帰国できなくなってしまった(それがもううらやましく)公然合法の映画監督)。今から考えれば、赤メンバー

ではなかったし、後輩客様もおいまいだったのだから帰國してしまえば良かったのですが、軍事至上主義の頂点に居た私は、『ならば赤に入ってしまえ』という発想しかありませんでした(赤セーフ返事で入ってしまった)。

こういったことあって、二つのグルーパとのパイアは切れてしましました。アラブに人を送り出したことは言え、路線を共有していたのでないで全く別の組織です。75年までに赤とやらいたグルーパは実質的に解散しました(VZ58の主流は赤と路線が大きく異なり旧ゴント系のセクトになった)。今や全くの他人、私に何の連絡もありません)。しかし、心構えには赤らに棲んでしまう赤は、75年の西川、元平岡志の説明、76年の奥平両同志の説明、87年の丸岡、翌年の赤木同志の説明になると、上述の二グルーパや赤と少しでも関わる(合法的!)のか、たんに傍観し、「旧反対側何とかやってくれるだろ」、「庄司糸港士が居るから牧場すやめてくれるだろ」となります。

つまり、赤自身には「牧場」を組合組織としての性を付けています。公然合法部隊の登場という面において重視化してこなかったつけた「牧場の合併」にも出て来ています。故に、国内で赤と噂されている人たちはいても、「赤の運営」としての方針を待っていないので登場してくても意味ではない、という事情があります。非合法には向いてないのですが、「被取引」や「牧場」は全く別の分野になります。その結果、旧反対たちや、赤との全く無関係の牧場運動の人たちに悩んでしまうことになります。

私自身が集隊に入りするまで、赤自身による歴史部の必要性を認識していませんでした。公然合法部隊の登場を副文の袖ヶ浦の元会にしかしていないが、私たちの差違です。

「2.5.30声明について」→次号に繰り越し

書評

『我が心のパレスチナ』

(バカル・アブデル・モネム著、関場理一訳、社会批評社)

この本は、バカル・アブデル・モネム氏という元PLO駐日代表（現在は駐日代表部は閉鎖されている）

の書いた本です。モネム氏が幼少の時に生まれ育ったパレスチナのラムレの町での生活から、シオニストのテロによって家族と共に故郷を追放され、ヨルダン・アンマンでの難民生活の中で、教育を受けてエジプト大学へ、そしてPLOファタハに入っての活動、ヨルダンで逮捕されてからの獄中生活、釈放されてからの様々な国際的活動を経て駐日代表になって日本の人々との関係を築き上げていく様子がえがかれています。

私がこの本を初めて手にしたのは3~4年前だったと思います。その頃私は中東の某国に行く機会があったために、アラブ地域で問題にされているパレスチナの情勢を「少しほとぎとして学んでおこう」という程度で何冊かパレスチナ関係の本を買ってきましたうちの一冊でした。それが、ごく最近になってまた、こういった救援活動に関わるようになり、たまたま再読してみました。このモネム氏という方が駐日代表だったときは幅広く日本のパレスチナ支援関係の団体・個人とつきあいのあった人だそうで、大衆運動では、パレスチナに連帯するキリスト者の会、パレスチナ解放連帯運動、三多摩パレスチナと連帯する会、広島パレスチナ連帯、関西パレスチナ人民と連帯する会、福岡パレスチナの会、他にもありますが紙面不足のため割愛させていただきます。勿論、国会議員からなる『日本・パレスチナ議員連盟』とも親交がありました。毎年11月29日に行なわれる、パレスチナ人民連帯国際デーの共同主催団体になっているところです。

モネム氏の故郷、ラムの町はリッダの近くにありました。1948年当時は、人口1万6千人の商業の町で地理的に重要な町であり、水資源にも恵まれて農産物の豊かな土地だったそうです。モネム氏にとってはこの町の記憶がパレスチナそのもの、忘れえない故郷なのです。この町もシオニストたちの占領によってパレスチナ人の追放が行なわれました。1922年の町の人口では、ユダヤ人は全体の8%を占めるだけでしたが、1945年には22%に膨れあがって、1948年にシオニストは町を占領してしまいました。

この本の第三章・シオニストのテロ、を読んでみるとイスラエルがどれだけのテロ行為を用意周到に準備し、実行に移してきたかが分かります。とくに1947年の国連パレスチナ分割案の採択以降、シオニスト自警団『ハガナ』（イスラエル正規軍の基幹）や民族軍事組織『アルゴン』これらのテロリスト組織が罪もないパレスチナ住民に対して、仕掛け爆弾や銃撃で容赦なく無差別虐殺を行ない、パレスチナ人のみならず全アラブ人民を恐怖のどん底に叩き落としています。私はこの本を読むまで知らなかったのですが、『イスラエル軍』

というのは、まさにこういった民間人を虐殺するために組織されたテロリスト部隊が、そのまま正規軍に変換され、あるいは編入された、土地略奪のためならテロをも厭わない「軍事組織」だということでした。そしてパレスチナ人が自分の土地を守るために戦って、捕虜になったり追放を拒んで町に留まつたりしたのをイスラエル軍は、収容所に押し込めてまるでナチスのユダヤ人収容所のような劣悪な環境での捕虜待遇を強制させたそうです。

話は飛びますが“第九章・戒厳令下のアンマン”では、1971年にヨルダン政府によるPLOの一斉弾圧があったときモネム氏もヨルダン諜報組織によって逮捕され、罪状も知られぬまま拷問を受けています。彼は三週間もの間、竹の棒で殴られていたそうです。さらに拷問をしていない間も、「彼らはテープレコーダーで、うめき声、叫び声をボリューム一杯に24時間、流し続けた」そうです。普通の人なら、かなり精神的にもまいってしまいそうですが、彼の如く「人間の体は、かなりの殴打と拷問に耐えられる」らしい。私だったら…などあまり考えたくもありませんが、殴られるより睡眠不足になると家族のことを考えるのが一番つらいのではないかと思います。彼は、やはり家族のこと、「これを考えると弱くなる」と書いていますが、彼は収監先も家族に知られないまま、別の監獄に移転させられていたにも関わらず、彼は他の獄中者に面会に来た農婦に自家の電話番号の書いたメモを渡して何とか居場所を伝えてもらい、逮捕されて三週間後で親族から弁当の差入れがあったそうで、その嬉しかった時の様子を「弁当は一人では食べきれない。シシカバブーとパンだった。みんなで一生懸命食べた。この三週間、初めて食べるまともな食事である」と語っています。もちろん彼のようにすぐに家族に居場所を知らせられれば良い方です。他の囚人はなかなかそうはいかず、何ヵ月か一年以上もあるいは殺されるまで、家族に居場所が知られないこともあります。モネム氏のこの差入れの翌日、彼の家族が面会に来て、これまで彼は、拷問に耐えるために家族のことなど考えないようにしよう、としていましたが「面会に来た父と母、それに妻」と会った時の様子を、「泣いてはいけないということになっていたようだが、耐えきれない。がまんができない。感動的な面会だった。看守も非常な感銘を受けていた」と、こう述べています。彼の父がのちに語っていたことによると「逮捕という経験を通じて、本当の友達がよくわかった」と、非常に親しくしていた人々が、話しかけることすら避けるようになった。ところが、それまでまったく知らなかつた人々が近づいてきて励ましてくれた。見ず知らずの人々がやってきて、名前も言わずにお金を置いていったこともある。こういう苦しい状況に立たされたときこそ本当の友がわかる

のだ…」また、彼の母については「…投獄されてから、デモの先頭に立つことになった。それまでの母は普通の主婦である。デモに参加したことではない。この母が、私の釈放を求めてデモにどんどん出ていったのだ」。こういった獄外の支援を得て、彼は1972年10月逮捕から1年半にして釈放されたのです。彼はこの直後、再び逮捕される恐れもあったので、カイロ大学入学を理由にヨルダンを出国したのでした。その後、彼がアンマンに帰ったのは13年後の1985年、第17回PNC（パレスチナ民族評議会）がアンマンで開催されたときでした。彼は73年妻子をカイロに呼んで生活することになりましたが、生活はとても質素でした。ちょうどこの頃、ファタハが月々のサラリーを支給するという決定が行なわれたときで、この低い給料だけでは家族と生活するのも一苦勞だったと思います。彼は学生と組合の2分野の組織化に関わっていたようで、また当時、パレスチナ学生総同盟の本部がカイロにあったので、こことの共同も行なっていました。こういった経験を積んで、彼は国際的な学生活動に従事していく事になりました、国際学連の副議長に選ばれています。そこでもかれは様々な国際活動の機会を得て、「それぞれの国々の最高指導者たちとの交流や議論の機会」も多くあったようで、彼自身の実力や知識を養うことになりました。「私の思想傾向はむしろ理想主義的なものである。だがこのような国際組織や国際活動で働いていると、どうしても pragmatism や現実主義に傾いていくことになる」と、述べているとともに、「閉鎖性を持たない、より開かれた、そういう心、思想を持つことができたということだ」といった経験則のようなものも述べていて、これは今私たちが、国際交流やさらには運動を持つうえで他団体、組織との共闘・共同を実践しようとするときにも大切なことだと思います。この様に、モネム氏は活動の視野を広げていきました。

こうして彼は、1983年に駐日代表として派遣されました。日本とパレスチナ関係について政府・政党レベルから大衆組織レベルまで、かなり広い分野で交流を持ったということは前に書きましたが、駐日代表部の事務所でもチーフスタッフの関場理一氏をはじめ多くの有志たちの協力を得て活動を続けるわけですが、彼は日本とパレスチナの関係に当時、3点ほど、特徴を述べています。第1に「日本はパレスチナ問題について友好国である…」、第2に「日本にはシオニストのロビー活動はない…」、第3に「パレスチナ問題、パレスチナ人民の闘いの情報は日本ではごく限られていること…」などですが、現在は、第3以外は必ずしもそうではないということです。第1について、日本政府与党（自民党）は中東湾岸戦争以降、中東における政治路線は米国がイラクと敵対する関係上どうしても米国との『同盟』関係でそこに追従するかたちになり、パレスチナ暫定自治について独自路線でイスラエルを含むアラブ諸国に問題提起できる状況ではありません。第二について、日本の中のシオニストロビーは、90年代に入って徐々に浸透していると言えます。ただし未だそれ程の成果は上げていませんが、イスラエル人の就労学生（商店での賃金販売など）を大量に送り込んで情報収集活動、活動基盤づくりには余念がない様です。第3については、PLOファタハのアラファト議長が来日して以来、マスコミなどもパレスチナ情勢について大きく取り上げる様になりました

た。しかし、大衆とくに若い層（海外商社マンを除いて）には、充分な知識を持った人が少ないようです。早急に情報の必要が問われています。

それと彼の人柄についてですが、この本でも書いていますが人と付き合ううえで「二つの顔を持たない」とのことです。彼の立場で一番大事なのは、パレスチナ人民にとってより良い方向になるように日本人とも関係を持っていくことでした。ですから、「日本国内の相対する勢力との間でいろいろな人々と接する場合」においても相手の組織の利害関係や党派的戦略に影響されることなく、自身のホームグラウンドである「パレスチナ」を第一に優先して日本人との関係を保っていました。多少、日本人の常識感覚から言うと、「これこそ八方美人だ！」とか、「美味しいとこ取り！」と見る向きも正直言ってありますが、幾多の苦難を乗り越えてなおパレスチナ人としての独自性を保ってきた人間の處世術と言うか、そういうもののなのかもしれません。

最後の部分で彼が述べています。「月が新月から三日目に姿を変えても、その実体はただ一つの球体であるように、真実をえることはできない。パレスチナの大義とは、その不变の真実である」。私はこの言葉に彼の信念をみるような気がしました。

1998年8月15日、 W.



『わが心のパレスチナ』表紙挿絵より
社会批評社

米国のアフガニスタン・スターダン空爆を許さない！主権・国際法を無視した野蛮な行為こそテロリズムだ！

8. 30 M

丸岡さんが指摘する「内ゲバ」が何を狙いとしたものであるのか？「しかもなぜこの時期に？」

これに対するマスコミ報道の基調はどれも「ホワイト・ウォーター疑惑から派生したセックス疑惑でピンチに立つクリントンが、国民の関心を逸らすために軍事行動に打って出たものだ」としている。今75号に転載したギャラクシー・ウイークリー・レポート「大統領のテロ報復演説は太袈裟なパフォーマンス」に見られる様に、国民の支持率を高めるための大仕掛けの演出が一貫されていることは明らかだ。

どの勢力がどのような思惑を以って動いているのか？こう考えながら、2. 27集会「難局を勝利の土台に！」の準備で、ある大学教授にアドバイスとして伺った言葉を思い出した。それは湾岸戦争後、中東の3つのフェイス(①パレスチナ ②湾岸地域 ③カスピ海沿岸地域)を持つ「中東」がどのように再編されようとしているのか？という文脈で語られた言葉だ。「いろんな力がそれぞれの思惑を抱きながら蠢いている。従って、一時的に主流から逆行し矛盾している様な動きが見えることもあるだろうし、またある時は全く見当違いの方角に飛び出た勢力が目立って写ることもあるだろう。いろんな勢力がそれぞれの思惑で駆け引きをし、引っ張り合いをしている。情勢の主流が掴めても、常にその方向だけに動くとは限らない。」

この言葉をいつも念頭に置きながらマスコミ報道をフォローし、自分の判断をぶつけながら、舵をとろうとしてきた。報道の裏に攻撃命令を出し、引き金を実際に引く人間が存在することは事実である。

1. イラクの検察官問題

8月26日、国連の検察団員であるスコット・リッターが辞任。理由は、「イラクが検察を拒否している現状に対し、国連事務総長などがもっと強い役割を果たす必要があるのに、それをしていないので自分は仕事が続続出来ない」というもの。対してイラクは[リチャード・バトラーを団長とする国連検察団はイラクの核施設の情報をCIAとモサド(イスラエル情報部)に手渡し、次の検察ポイントについても相談していた]と非難していた。91年湾岸戦争後に合意された安保理決議715、687はすでに全ての検察を完了して要件を満たしているのに、なぜ未だに制裁が続行されているのか？という声はアラブ諸国間で徐々に高まっている。

米国は国連を利用し、政治的にイラクとの緊張関係を継続しながら、また一方では、具体的に反イラク勢力への軍事支援を再び本格化しようとしている。この計画は500万\$をつき込み、イラクの反体制グループを訓練し、更に別の500万\$でプラハにラジオ・フリー・ヨーロッパやラジオ・リバティによる“ラジオ・フリー・イラク”を開設しようというものである。また今年の冬には、イラク北部の反体制クルド人組織であるクルド民主党のマスード・バルザーニとクルド国民会議のジャラール・タラバーニをワシントンに招請し、反フセイン政権での統一を促すとされる。現在、反イラク組織は73つにも上ると言われている。

CIAは1億2000万\$をつき込んだフセイン打倒工作が96年9月に失敗したにも関わらず、こうした挑発政策の継続を今後も米国の外交政策の一貫としていくのだろう。ここにはカスピ海沿岸地域の原油利権・輸送パイプラインの経路での争いも背景にあるのは確実だ。前号でも登場した米國の中東政策立案者マーティン・エンティックは「彼らクルド人達が反フセインの動きを準備しているのであれば、共に準備を進めよう。我々は目を開き、この地域に反フセインで統一勢力が確立するという現実的な理解に立ち、彼らと行動を共にするのである」と明言している。(8月2日付けのワシントンポスト紙より)

2. 米国の“民主主義”

他国の主権を踏みにじり、反体制グループを訓練育成し、現政権の転覆を企てることは米国の“民主主義”的手段である。言うまでもなく、今回のテロの黒幕として、「証拠も無く」標榜的にさされているウサマ・ビン・ラディン氏も、米国が冷戦

下で対旧ソ連戦略上、イスラム原理主義勢力を支援する中で育てられてきた。「アラブ治安筋によると、アフガン内戦中にこの富豪がCIAとしばしば接触し、非常に良好な関係にあった。1989年の旧ソ連軍撤退まで、アラブ義勇兵がパキスタンのペシャワールで米国機関から武器供与を受け、内戦に参加していた事実は広く知られている。旧ソ連軍撤退後も、対イラン戦略上、米国は反イランでラティン氏を匿うタリバンを支援してきた」(東京新聞・8月21日夕刊より)

3. さらに混迷を深める「和平」とテルアビブでの爆弾闘争

8月27日、テルアビブのユダヤ教会付近で爆弾が爆発し、12人が負傷した。97年3月以来初めて、「和平」が混迷を深めていることが分かる。

99年5月4日にテット・ラインを控えたオスロ暫定合意に基づく「和平」の見通しについて、アラブ・リーグのサイード・カマル(パレスチナ問題担当書記局補佐官)は、「ネタニヤフは大統領の2年後に行われるイスラエル大統領選で勝利し、2期目の継続を第一に考えているので、2000年までは「和平」の進展はない」と断言した。そしてまた、前号でも登場のマルティン・エンティックは、7月29日に「和平は死んではないし、依然生きている。がしかし、依然先行きは見てこない」と深い失望を下院の国際問題委員会で表明し、同時に「小さい問題、例えば道をどこに作るなどの問題は当事者間で協議してほしい。当事者の和平への熱意が無い限り、米国が仲介することは出来ない」と米国のイニシアティブが弱まっている点を当事者の熱意不足のせいであると仲介者としての責任回避に懸命だった。前号掲載のシリアのアサド大統領のフランス訪問に関し、その主要な目的がシリア・イスラエルの「和平」交渉の取っ掛かりを探るものであったことが報じられた。だが、イスラエルは特使を介し届けられたフランス仲介和平案を蹴った。ロンドンのアラブ日刊紙アル・ハヤット紙(サウジ資本)の報道では、「シリアのアサド大統領の訪仏前に、イスラエルのウジー・アラッド外交アドバイザーがフランスのイニシアティブでの提案を拒否。理由は「ネタニヤフ政権は連立政権があるので、パレスチナ国家を承認することは出来ない」というものであった。提案骨子は以下。(7月26日ハーレツ紙による)

1-イスラエルはシリアの和平における役割の重要性を理解し、今回の訪仏が実り多いものであるよう望んでいる。

2-イスラエルはシリア・レバノンとの和平を望んでいる。もしシリアが真剣に交渉を望むのであれば、イスラエル側も真摯に対応する。そして保安問題が双方から提案される。

3-シリアはイスラエルとの自然で良好な相互関係を望んでいる。それは唯一、マドリッド合意で確認された「ランド・フォー・ピース」(平和と土地の交換)の原則及び、国連安保理決議425に基づくものである。(イスラエルはこの425決議を削除するよう執拗に求めたと言う)

4-シリアは保安がイスラエルの最優先課題であることを認め、イスラエルは領土の返還が最優先課題であることを認める。

5-イスラエルは交渉はゼロからのスタートなのではなく、マドリッド合意の確認された原則を踏まえたものであることに合意する。

6-イスラエルはシリアとの和平を包括和平に向かた基盤として真剣に当たる。

4. レバノン南部での軍事的緊張

ヨルダン紙報道(8月28日)によれば、イスラエルが6人委員会を設置し、ターゲットを巧妙に選別している。こうした南部での軍事緊張がイスラエルの一方的な挑発により高められている中、レバノン政府は4月合意に反する攻撃として国際的な制裁を求めており、南部ではイスラエルによる96年4月“怒りの葡萄”作戦以来最大の軍事攻撃が行われている。

5. 今秋のレバノン大統領選挙

ラタキアで4月、トロイカ会談(ハラウィ/ハリー/ベリ)が行われたが、大統領選については「黙する」ことを決め込んでいる。憲法49条を改定し、候補はマロン派なら誰でもOK(現在は元軍籍を持つ者は軍籍を離れ、最低3年間を経てからでなければ候補にはなれないとされている)とする案もある。

現在、有力視されているのは、ラフォード(軍司令官)。そしてもう一つの選択は、ハラウィがもう1回任期延長すること。情報筋によると、大統領選に関してシリアが焦点にしているのは、①行政改革一官僚機構の再編に強い姿勢で当たることが出来るのはラフォードが最適。②経済政策一ワイヤロや不透明な金の流れを改善。③クリスチャン社会の中での信頼一特に現政権へ批判的な層との関係を改善出来ること。④強力な国際関係の4点であると言われている。

大統領のテロ報復演説は 大げさなパフォーマンス

1. 内外の目をそらしたいとの不純な動機?

クリントン大統領のスーダンおよびアフガニスタン攻撃は、「米国が敵国と戦火を交える時は、米国民は超党派で、最高指揮官である大統領の下に結集する」との伝統を崩さずに挙行された。それまで、モニカ・ルーウィンスキーとの下世話な話で持ち切りであったマスコミやワシントン雀も、一瞬にして真面目な仕事に立ち返ったかに見えた。

だが、この緊張は二日と続かなかった。新聞論説委員はじめ、議会人、それに民主党の陣笠までが「クリントンの中に自己のスキャンダルから内外の目をそらしたいとの不純な動機が絶無とは言い難い」といった軽いコメントが出始めた。

2. 大統領の発表はたったの9分

クリントン大統領は休暇先のマーサズ・ビンヤードで午後2時に「重大な発表がある」と予告し、ここからプレスはクリントンが専用機に搭乗、離陸するところから、ワシントン郊外のアンドリュース空軍基地への到着、そこから海兵隊ヘリコプターでホワイトハウス入りするところまで、延々と報道し続けた。やがて予告の5時30分にホワイトハウスで記者会見が開かれた。両国への攻撃を伝える大統領の発表はたったの9分だ。2時の予告から3時間半。その内容をクリントンはマーサズ・ビンヤードで2時に正確に国民に発表できたはずだ(攻撃命令は早朝3時に出し、直ちに巡洋艦からトマホーク巡航ミサイルをアフガニスタンに40発、スーダンに20発発射し、その結果は朝食までに掌握していた)。

大仰な予告記者会見や空を乗り継ぐ大名行列とホワイトハウス入りで行なったものものしい9分間の発表とは何だったのであろうか。また、クリントン大統領が強調するように極めて重要な内容で直ちに国民に告げるべきものであったなら、なぜ道中に時間をとり、主権者である国民を不必要に3時間半も待たせたのだろうか。なぜそこで直ちに9分間の演説を行ない、国民に全貌を説明できなかつたのか。

3. ホワイトハウス発表としては最大規模のもので、何も内容がないなんて?

今回の発表を、アフリカの米国大使館が襲撃された時の発表と比較してみよう。クリントンはその時、政治献金募金活動と称してコロラド州アスペンの避暑地へ出かけて、終日ゴルフを楽しんでいた。爆破発表を聞いても動じず、そのスケジュールを変えようともしなかったという。発表は現地で事務的に行なわれている。クリントンが大統領として関与した最大の海外攻撃は1995年のボスニア空爆であった。これは米軍が決行した欧洲における戦後最大の爆撃であった。しかし、この時クリントンは家族とワイオミング州のジャクソンホールで休暇を楽しんでおり、休暇先での手短かな国民への報告があつただけで、彼はもちろんワシントンへ帰らず、休暇は最後まで楽しんだ。

今回の2カ国攻撃には航空機さえ使用していない。船から巡航ミサイルを打ち出しただけだ。戦闘攻撃の規模は上述の場合とは比較にならないほど軽微なものだ。今回の9分間の大統領報告の後に、国防長官、国務長官、統合参謀会議議長、大統領安全保障補佐官による報告が続く。ホワイトハウス発表としては最大規模のものだ。しかし議事録を読むと明瞭だが、何も内容がないのである。クリントンの発表はもとより、オルブライ特國務長官もバーガー安全保障補佐官もただただ、「わが情報筋によれば確実な情報として両国がそれぞれの地域で対米テロ関係活動を許容支援しているから、次の攻撃を止める意味で先制攻撃を決行した」というだけであった。記者の「情報とは、証拠とは」との質問には一切「国家機密で公言できない」という答えだけで終わっている。

大統領は9分間のスピーチを終えると、また500人を運ぶことのできるジャンボ大統領専用機を駆って、「激怒している」ヒラリーの待つ休暇地に戻つていった。

(以上、全文は[ワシントン・コンフィデンシャル])

◆◇◆ギャラクシー・ウイークリー・レポート◆
◇◆過去1週間の米国新聞が伝える日本の姿
や米国政治・経済が簡単に読める米国新聞論調
報告 1998年8月28日、第33号第1部より)

注: 文中小見出しは編集部で付けました。

8月9日から16日まで、初めてのお盆休みが1週間ありました。久しぶりの休みですから、泳ぎに行きたい、本を読みたい（東拘でもう沢山という程の読書三昧を楽しんでいたのですが）、山へ行きたい、ミシンを踏みみたい等などの無謀な予定はすっかり流れ、やったのは、浴田、丸岡への面会、泉水のお兄さんのお墓参り、洗濯、ちょっとした片づけ。

しかし、ゆっくりと骨休めもでき、ゆったりとした気分の1週間でした。

休み明けの月曜日、掃除歴20年になろうかという先輩の方が、「具合が悪い」との事で、出勤早々、早退され、以来休んでいます。肺炎との事。大変細い方で、自慢話しと愚痴が玉にきずのところはあるものの、私の煙草仲間でした。毎日、お茶の後に、決まった場所で、彼女と煙草をくつらしながら、「肺ガンが恐くて、煙草が吸えますか迷惑をかけないように、マナーを守って吸えれば良いよね。」などと言い合っていたものです。彼女が休んでいるので、私はさみしいのです。

彼女は、掃除を始めてから、膝の後ろに水が溜まり、完治は難しいと言われたものの、何とか治してしまったそうです。それでも、身体が弱って、日勤は止めて今では半日のパートでした。彼女は、「自分ながら、よく日勤をあれだけ勤めたと思うわよ。何度も止めようと思ったけれど、どうせ、何処に行っても、似たようなものだろうと思ってあなたも、よくここまで頑張ったわね」と言いました。

彼女とは、通勤路も一緒なものですから、毎朝、彼女の後ろ姿を探して歩いてきました。今でも、「あの入、今日は出てくるかな?」と、彼女の姿を探してしまいます。あんなに細くて、丈夫そうには見えなかつた人が、肺炎。65才でもあるので、心配です。去年も、お盆休みの後に肺炎を患つたそうですから、余計に心配なのです。家族とも余り心が通つた生活をしているようには聞こえなかつた方ですが、いざ病気になったら、さみしい事でしあう。早く元気になって、顔を見せて欲しいと毎日願っています。

一方、現実の仕事の面では、彼女が抜けた分、他の人に負担が行く訳で、彼女のパートナーは黙った引き受けています。昔大変世話をになった親戚の介護に、月に2回、2時間かけて通っている人です。大変おつとりした人で、「私、身体が疲れて仕方がないのは、私が根性無しからだと思ってたけど、皆さん、そうなんですか？」と言つて。大変汚れた所を担当しているのに、自分からは決して文句、愚痴を言わない奥ゆかしい方。本当に好一対のコンビでしたのに。今度は、彼女の方が潰れないように、それが気がかりでなりません。

彼女が休んでいる間に、新人が続々登場。という事は、私もいつの間にか、まあ、「中堅」。

新人が登場して困るのは、仕事の継承性というか、どう指導するのかという事。誰に教えて貰うかで、全く違うのです。仕事に対する誠意、人に対する見方、生き方によって、教え方が全く違うからです。担当する部署によって、どういうやり方をするのかはあります。ビルが11位ある訳ですが、毎日ヒールマークを落とさなくてはならないのは、私のビルだけです。契約によって、決められた仕事がある中で、きちんとやる人、ぎりぎりしかしない人、どう見ても契約以下という仕事ぶりの人、いろいろ。

また、7月末から始まつた定期清掃の中から、最も多くは素人で、自分をやばりかかる第一線で活動する人もいて、新人の皆さんは面食らうに素直に聞くです。反面、人生50年、それなりに第一線で活動して来たという自負もあるらしく、大型新人がいて、ちょっとしたショック・ウェーブ。

問題は、仕事のやり方のマニュアルというか、基準がないことではないかと思います。新人は慣習もせず、また、2人前位働く人に賃金の差もありません。会社は、清掃の素人集団に講習もせずに、そのままモップ拭き、ワックスかけなど命を置いて活躍して来たという自負もあるらしく、ちょっとしたシック・ウェーブ。

これまで、問題にならなかつた事を思えば、この程度のばらつきでも差し障りがないという事なのかもしれません。

しかし、定期清掃では、会社が放置している「私のやり方」「俺のやり方」の相違が、現場の「私のやり方」であります。「この程度でも構いません。」「教えていい」とすると、人と人との間に、使つて、今まで見えてきた方針らしいですが、それが違います。それは当然ですが、仕事の内容が契約に見合うのかどうか、会社は責任を負つた方が良いのではないかと思います。

これまで、問題にならなかつた事を思えば、この程度のばらつきでも差し障りがないという事なのかもしれません。

しかし、定期清掃では、会社が放置している「私のやり方」「俺のやり方」の相違が、現場の「私のやり方」であります。「この程度でも構いません。」「教えていい」とすると、人と人との間に、使つて、今まで見えてきた方針らしいですが、それが違います。それは、自己点検ができるかどうかの違いかも知れません。私の最も苦手とするところですが、何とか一人前になりたいものだと、毎日精進を重ねています(つもり)。

何となく、世の中のすべてを掃除に1面化しているのではないか、という疑問を感じたりもしますが、それでも、始めた以上、きちんと身につけていこうと思います。

カンパニ協力
有難うございます！

会計報告

(98年7月20日現在 6/24~7/20)

収入

カンパ	¥ 180. 200
購読料	¥ 6. 000
会費	¥ 1. 000
計	¥ 187. 200

支出

切手代	¥ 24. 930
ザ・バス印刷代	¥ 200. 000
送料	¥ 4. 252
弁護士費用	¥ 60. 000
通信費	¥ 15. 557
計	¥ 304. 739
繰越金	¥ 861. 834
収入	¥ 187. 200
支出	¥ 304. 739
現所持金	¥ +744. 295

借入金 ¥ -1. 940. 000
緊急カンパ(レバノン被災)
¥ -3. 000. 000

会計報告をもっとわかりやすくと
いう意見をいただきました。検討
して変更していくきます。過剰な部
分や不十分な点があったことをお
詫びいたします。

ご意見有難うございます！

◎編集後記

読者のみなさま、しばらく間か
あいてしまってどうもお忙せしました。
編集員は、おぼん休みでどこかに
行。たかと思、たらビンボーなためが
どこにも行かず、家でパソコンの
キーボードをたたいたり、新宿公園で団碁を
打ったり酒飲んだり、それなりに有意義?!
にすごしたらしい...

さて、かじんの最高戦記補充書1,2. の
内容を次号で紹介させて頂きます
ので、こちらをお読みください。

8・29(憲法・団体取締法を廃案へ)
全国集会に行ってきた。
さまざまな戦線から、闘団人、団体が
参加して参加者総額600人以上は
こえていたようです。労働団体代表や
弁護士、国会議員のアピールが集会で
述べられ、特に国鉄千葉勤労の人々演壇
に上がると場内がワーヒモリあがて
熱気が熱つかれました。

◎インフォメーション

9月11日 地裁公判傍聴
AM 10:00 ~ 西川純裁判
PM 1:30 ~ 洛田由紀子裁判
があります。
帰國者の裁判を考える会
AM 9:00 から 東京地裁前でヒラ配り
(丸岡上告審、上申書ハガキ作戦)